
ええ～めんどくさい

マエダルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええ〜めんどくさい

【Nコード】

N8017X

【作者名】

マエダルマ

【あらすじ】

めんどくさがりの主人公に起こる様々な出来事を解決していく話です。バトルや笑いなどの要素もあり、主人公最強ものです。

プロローグ

俺の名前は見中 央太。

俺のいる世界では魔法が当たり前に存在している。まあ、もちろん使えない人もいない訳ではない。使えたとしても、魔法は属性魔法と無属性魔法があり、属性魔法は一人一種類しか使えず、魔法は火、水、電気、風、土、草、召喚術の7つある内のどれかである。俺はまあ、いろいろだな、うん。そして無属性魔法は誰でも使えるものである。

俺は今、日本にいくつかある魔法学校の、第9魔法学園の一年生である。

まあ、軽い気持ちで入ってしまったのだが、俺の予想とは異なる生活が待っていた。

学園へいこう？

「ふあゝあ」

大きな欠伸しながら俺の目は覚めた。只今、午前6時である。

いつもは、こんなに早く起きないのだが、今日は入学式ということもあって、姉貴が早く起こしたのだ。

ふと、横に違和感を感じて見てみると、女の子が一人俺のベッドで気持ち良さそうに寝ている。

その女の子は、水色の髪を腰まで伸ばしていて、顔は百人中百人が振り向く程の美少女だ。

俺が起きたことを感じ取ったのか、その子も体を起こして、

「お兄ちゃん、おはよう。」

と、俺にいった。

「また、お前忍び込んだのか？」

と聞くと、

「何言ってるの？お兄ちゃん。私とお兄ちゃんは一心同体なんだから同じベッドで寝るのは、当たり前じゃない。」

といきなり頭の痛い発言をしてきた。

まあ、いつものことなので気にせず朝食の用意がされているであろうリビングに降りていった。

ちなみにさっきの女の子は俺の妹である見^{みな}中^{なかつ} 真^{まこと}という子でちよつ

とした、いや、かなりのブラコンである。年は俺と同一年だが双子という訳ではない。そして、俺には、姉貴^{あね}がいて、彼女の名前は見^み

中^{なかつ} 雫^{しずく}

真と同じように水色の髪をもつかなりの美人であるのだが・・・

「央君おはよう！」と言いながら、いきなり抱きついてきた。

そう、この人もここが問題なのだ。真と同じ、かなりのブラコンで

ある。

やれやれと思いながら、姉貴をはがして席につき朝食を食べ始めた。ちなみに俺の両親は今、海外へ赴任中で俺たち三人しかない。と思っている内に姉貴が俺の方をみてニヤニヤしていることに気付いた。あまりにも気持ち悪かったので理由を聞いてみると、

「だって、これから毎日、央君と一緒に学園まで行けるじゃない。」

「
」
といってきた。俺ははいはい、そうですかと軽く受け流し、食べ終わったので皿を片付けようとしていたら、姉貴が俺を呼び止めた。いったいどうしたのだろう？と思っ
て振り返ると、

「ご飯粒ついてるよ」といって、俺の頬についたご飯粒をとって、そのまま口に持っ
ていきそれを食べた。
まじかよ。

普通ここまでするか？おっと、うちは普通じゃないんだった。でもなんとなく恥ずかしかったので、ちらりと姉貴の方を見てみると、姉貴は嬉しそうにニコニコしていた。だが、急に殺気を感じたのでそちらの方を見てみると、俺の後ろで手を握りしめたまま真が震えながら立っていた。そして次の瞬間、

「お姉ちゃん、ずるい。お兄ちゃんについたご飯粒食べるなんて！そんなことするなら、私はお兄ちゃんを直接なめるもん！」

いや、妹よそれは違うんじゃないか？と思っ
ていると、

「別にいいんじゃない？そしたら、私も思う存分できるし。」

と、姉貴が言った。

おいおい、あんたら頭大丈夫か？もう病院行ってこいよ。とか、考
えていると、

「ダメだよ。お兄ちゃんは、私の物なんだから。」

と姉貴に向かって言っていた。もうツツコム気もねえや。

「あなたこそダメよ。央君は私の物なんだから。」

と姉貴が言い返していた。そのままお互いにらみあったまま、真が突然手を前の方につきだして

「水よ私の刃となり切り裂け、アクア・スラッシュ」
とまさかの、呪文を唱えてきた。それは三日月型を描いて姉貴に向
かって行った。しかし、姉貴も全く同じタイミングで同じ呪文を唱
えていて、2つの魔法はぶつかり消えた。
真も姉貴ももう新しい呪文を唱えていた。姉妹喧嘩で魔法使うとか、
どんだけなんだよ。と思いながら、俺は学園にいく準備をしていた。

学園へいこう？（後書き）

ぜひ、感想をお聞かせください。

学園へいこう？

あの後、喧嘩していた姉貴達をめんどくさいので、無視して行こうと思つたら、俺が家を出る直前に喧嘩をやめ、準備を済まして、（ちなみに準備は俺がまばたきしている間に終わっていた。）俺の腕に抱きついてきた。二人を引き剥がすことは、めんどくさいのではない。むしろやったとしても、この二人は絶対に離れないだろう。そしてその二人は俺を挟んだままにらみあっていた。「よそでやってくれ」と思つてはいるが、もし言つたのなら、想像出来ないほどめんどくさいことになるだろう。

そんなこんなで、歩いていると、

「おゝい。央太」

と元気な声が聞こえて、ドン！と背中に衝撃がきた。振り向いてみると、赤い髪をショートカットにしたボーイッシュな美少女が俺の背中に抱きついていた。

彼女の名前は、

西名 炒子（にしな　しょうこ）俺の幼なじみズの一人である。

「おはよう。央太」

「ああ、おはよう炒子。てゆうかさ、離れてくれない？」

「ええゝ何で？」

何でって……はあ。

俺が心の中でため息をついていると、俺にしか聞こえないような声で、

「だって、こっちの方が面白いじゃない。それに央太さえよければ私かまわないよ。」と後半の部分は姉貴達に聞こえるようにいつてきた。

こいつは、何がしたいのだろうか？姉貴達に「あなたを殺して私も死ぬ！」

的なことを言わせたいのだろうか？

「ちよつと、お兄ちゃんから離れてよ。炒子。」

「そうよ。炒子ちゃん。央君は私の物なんだから。」

いや、別に姉貴の物じゃないぞ？

「ちよつと、お姉ちゃんどさくさに紛れて、何いつてるのよ！お兄ちゃんはもう私とあんなことや、こんなことをしてるんだからね！」

お前こそ、何をいつているんだ！？俺はお前と何もやった記憶はないんだが！？何はともあれ、これ以上、天下の往来で変なこと言われたら、たまらないな。そろそろ止めるか。

「おい真、嘘ばっか・・・」

「おはようございます、央太様。」

ああ、おはよう。」

今、俺に挨拶してきたのは、イギリスにある大企業のご令嬢で、彼女の名前は

エレクティア・イーストといって、キレイ金色の髪をサイドで軽く括って、残りはそのままにされていて、腰まである。彼女もかなりの美少女だ。皆はエレンと呼んでいる。

「時に央太様、私と今から、良いことしませんか？」

「いや、しねえーよ！？」

「即答ですか・・・でもでも、私は諦めません。」

といいながら、俺に体を寄せてきた。

いや、もうそこはあきらめれば？

にしても、そろそろ離さないといけないな。

「おい、皆そろそろ離れて・・・。」

「死ぬリア充。」という声が上から、鎌鼬と一緒に降ってきた。

俺は急いで身体強化魔法を使って俺に張り付いている奴らごと移動し、避けた。

「おい、危ねえじゃねえか！」

「黙れ、このリア充。大人しく消えろ！」

と俺に向かって吠えているのは、薄い緑色の髪を首の中間ぐらいまで伸ばして結んでいる。こいつの名前は、神谷^{かみや} 風希^{ふうき}こいつも、俺の幼なじみズの一人である。こいつの属性魔法は風であるため、飛ぶことができる。まあこいつ、結構イケメンなんだが、性格に難があるため、残念な二枚目と呼ばれている。

「風希！お兄ちゃんに何してんのよ。」

「そうよ、風希くん。して良いことと、悪いことがあるわよ。」

「もう、これはあれですね。」

「そうだな。あれしかないな。」

「あの、皆さんあれとは何ですか？」

と風希がビビりながら聞くと、

「……決まってるじゃない（ですか）（か）死刑だよ」「……」
と言った瞬間、風希が逃げようとしたが、エレンが身体強化魔法を使い、捕まえた。（エレンは電気の属性魔法が使えて、普通は無属性魔法である、身体強化魔法も電気属性を付加すると、かなり速くなる。）

はあ、全く風希もアホだな。

「お兄ちゃん。先にいつててくれない？」

「わかった。ほどほどに……いや全力でやってやれ。」

風希がこつちを嬉しそうに見てきたので訂正したら、憎しみを込めた目で見てきたが、無視して俺は学園へ向かった。

入学式？

その後、何事もなく俺は学園についた。

学園に着くと、見た目の良く似た双子が、話かけてきた。

「おはよう、央太。」

「おはよう、央太君。」

話かけてきた双子の男の子の方の名前は、あみや 亜宮 しょうじ 召慈
女の子の方の名前は、あみや 亜宮 かなな 神流という。こいつらも、俺の幼なじみズである。

「ああ、おはよう。召慈、神流」

「今日は、残りの皆はどうした？」

「そうですよ。他の皆さんは？」

「さあ？でも、多分今頃……」

「お兄ちゃん。」

お、来たな。風希は？。」

「えっ、風希誰デスカソレ？」

「いやなんでもない。」

「なに？風希がまたやらかしたのか？」

と召慈が聞いてきたので、

「ああ。俺に向かつていきなり鎌鼬撃ってきたんだよ。そしたら、真達が怒っちゃってさ。」

「成る程な。でも、可哀想だ……いや、風希が悪いな。うん。」

でさ、風希生きてるのか？」

女性陣が鋭い目付きでこちらを見たため急に言葉を変えた召慈がこっそりと聞いてきたので、

「わかんねえ。今日は、真と姉貴が家を出る前に喧嘩していたからな。」

「そいつはまた……御愁傷様だな。」
と俺と召慈が黙祷を捧げていると、

「なあ、央太。くる途中こんなもの拾ったんだが。」

と声をかけられた。声のした方を見ると、ぼろぼろになった風希を担いでいた。そいつは、俺の幼なじみズの一人で、名前は北波^{きたば}圭悟^{けいご}といって、なんつうかまあ、でかいやつだ。「うーん。まあ、しょうがないしからな。真、キズが見えないように治してやれ。」

真は「ええ」と言っているが無視することにする。ここで話は変わるが、真は水の属性魔法を使うことができる。水の属性魔法には、治癒魔法が入っている。

「圭悟、そんなの拾ってこなければよかったのに。」

と炒子が言ったので、圭悟は不思議そうな顔をした。

それを見ていた、エレンが説明すると、納得したような顔になった。（圭悟は表情の変化が分かりづらく、分かるのは俺達幼なじみズとエレンぐらいのものだ。）

しばらくそのまま雑談していると、

「あ、大変もう私行かないと。」

と姉貴が言ったので、俺達も会場である体育館に向かうことにした。

入学式？

体育館に着いて、しばらくすると、入学式が始まった。

ちなみにこの学園は、入学式の時点ではクラスが決まっていなかったため、自由に座ることが出来る。だから俺と幼なじみズは固まって座っていた。

そして、この入学式の後に属性魔法との相性や魔法の発動速度、魔力の保有量の三点を計測して、クラスを決めることになっている。

また、魔法には現代魔法と古代魔法がある。現代魔法は魔法補助装置（SAS）と呼ばれる機械が必要だが、呪文詠唱がなく自分の思った通りに使うことができる。SASは使う人によって、様々な形をしていて腕輪だったり、ネックレスだったりする。

次に、古代魔法は何の機械もいらぬ。しかし、呪文詠唱があり決まった魔法しか使えない。

でも現代魔法とは、比べ物ならない威力を誇っている。

そもそもSASとは、古代魔法が呪文詠唱によって魔法陣を展開するのに対し、予め作っておいた魔法陣を記録して、使用者の意志に応じて展開する装置である。それなら、古代魔法も記録させればいい。と思うかも知れないが、この世界で声とは、かなり重要な意味を持つため、言葉でいうことが大事なのである。また、魔法陣を言葉に置き換えることは不可能に近いため、古代魔法と現代魔法に別れている。魔法の発動速度は現代魔法の発動速度を表している。さて、入学式の方は始まってから結構な時間が経っていて、そのほとんどが学園長とか言う太ったオッサンの話である。もう、何でもという人の話は長いのだろうか？早く終われよ。むしろ終われ。てゆーか、消えるこのくそ豚が！おっと、やっべ殺意が湧いてきた。俺は自分を落ち着けるために周りを見てた。すると、風希が完全に寝ていた。（風希は治癒魔法を施された後、目をさまして何とか歩けるくらいまで回復していた。）

風希の横を見ると、圭悟がすっかり背筋を伸ばしたまま寝ていた。まあ、こいつは昔から変なところで真面目だったので別に珍しくない。

いや、まあ珍しくないだけでおかしくはあるのだが、めんどいので起こすようなことはしない。てゆーか、もう飽きたのでフケてしまおうと思い、こっそりと脱出することにした。そしてドアの前まで来たとき、

「あなたどこにいくの!!」

と全国のロリコンが聞いたら悶え死ぬようなかわいい声が聞こえ、ドアが氷付けになっていた。うんざりしながら前を見ると、どこからどう見ても小学生にしか見えない女の子が壇上からこちらを見ていた。

「あなた、計測の後理事長室に来なさい。」

どうやら学園長の話は終わり、理事長の話になっていたみたいだ。

しょうがないので席に戻り、そのまま入学式を受け続けた。

しかし、風希はこちらを見てニヤニヤしていたので、ドアの方に身体強化魔法を使い思いつき投げつけてやると、ドアごと氷付けになっていた。ざまーみると思っていると、幼なじみズが冷たい目で見えてきた。

その後、入学式も終わり測定が始まった。俺はやる気なんて微塵もなかったので、適当に済まして皆と喋りながら、理事長室に向かわず帰ろう。と思い校門で待っている幼なじみズに手を振ろうとしたら、背中に違和感を感じた。振り向いてみると悪魔のような笑みを浮かべた理事長が背中に張り付いていた。

「さあ、行きましょう央ちゃん」

「はい。理事ちょ・・・いや、^{みぞれ}雲伯母さん。」
と俺は苦笑しながら答えるのだった。

理事長室での出来事

そんなこんなで俺は今、理事長室にいる。風希と一緒に。

俺は雲伯母さんに捕まった後、取り敢えず校門にいった。校門へと進みながら、どうして理事長室に行かないといけないのか聞くと、俺が入学式をサバろうとしたかららしい。まあ、当然そんなことは分かっていたが、俺は言質が欲しかったので、そんな分かりきったことを聞いたのだ。

この言葉が意味するものは……

「よし、じゃあ行ってくるか。ほら、いくぞ風希。お前達は先に帰ってて良いぞ。」

「ちょ、何でお

「いいよ、お兄ちゃん。私達待つてるから。ねえ皆？」

「私もそれでいいですよ。」

「私もかまわないよ。」

「私もいいわよ。」

「僕も異論はないかな。」

「俺もかまわんぞ」

て、聞けよお前ら！！」

と上からエレン、炒子、神流、召慈、圭悟の順に了承の返事をする。
「わかった。それじゃあ少し待っててくれ。ほら風希自分で歩け。」

「くそ、何で俺もなんだよ。」

と愚痴ってきたので、俺はさっき雲伯母さんから得た言質を使った。

「それはお前が入学式を抜け出そうとしたからだよ。」

「なあ！！それはお前が俺を放り投げたからだろ！？くそー理不尽だー」

と俺に引き摺られながらも叫んでいた。

そして、理事長室に来たのだが、霧伯母さんが風希を見た後、

「なんで風希君がいるの!？」

と若干きれながら言ってきた。俺は、

「だって、霧伯母さん

「伯母さん言うな!」

・・・霧さんが入学式を抜け出そうとしたから呼び出した。って
言ってたじゃないですか。そしたら、風希もだناと思って。」
と言うと、

「分かったわ。それじゃあ・・・」

と言いながら机に置いてあったベルを鳴らした。すると、体のゴツ
イお兄さん達が出てきた。

「そこにいる子をあの豚・・・じゃなかった、学園長の所に連れ
ていって反省文でも書かせときなさい。」

霧さんが命令を出すと、お兄さん達は風希を担いでいってしまった。
その時、風希は売られていく子牛のような目をしていた。さすがに、
俺でも、可哀想だな。と思ったが、自分の方が大事なので霧さんの
方を向き言い訳を始めた。

「いや、俺は別に霧さんの話を聞きたくなかった訳じゃなくて

「そんなことどうでもいいの!」

・・・・・・」

ええ〜じゃあなんで呼び出したんだよ。全くこの人は意味がわか
らない。一応俺の伯母さんにあたる人なのだが、見た目は小学生の
くせに、実年齢はぐふあ!？」

「ちよつと、いきなり殴らないでくださいよ!？」

この人はいきなり身体強化魔法をつかって殴ってきた。しかも、誰
も反応出来ないような速度で。にしても、よく無事だった俺の首。

普通ならもげてたね。うん。

「仕方無いじゃないの。女性の年齢を勝手にばらそうとするからよ。」

え、なにこの人。人の心の中まで読めるの！？と俺は戦慄しつつも要件を聞いた。

「じゃあ、何で呼んだんですか？」

「それは、私と央ちゃんが愛し合った

「失礼しました！」

ちよつと、待ちなさい。」

俺は全力で逃げた。身体強化魔法の発動と同時にそこにあつたものを雲さんに投げつけた。何とか理事長室を抜け出した俺は、風希の所にいくことにした。階段を登ろうとしたとき、足を踏み外したのか翠色の髪をしてメガネを掛けた女の子が降ってきた。俺は仕方無くその女の子を受け止めて、抱き抱えたまま階段を登った。登りきると、女の子を下ろして先に行こうとすると、女の子が声を掛けてきた。

「あの、ありがとうございます。」

「いいよ、別に気にしなくて。」

しかし、この子改めて見ると美少女だな。おっと、急がないといけないんだった。

「あの、お名前は・・・」

「ごめん。急いでるから、また今度ね。」

え、はい。わかりました。」

「じゃあね。」

さて、風希が居るのは職員室だろな。さっき風希から居場所を伝える風が届いたし。

そして、俺は職員室のドアを開けて、

「風希、帰るぞ！」と声をかけると、待つてましたと言わんばかりに喜んでいた。そのまま、廊下側の窓から飛び出し脱出した。校門まで向かう途中雲さんから、「今日のところは勘弁してあげる。」

とメールが来たので俺は安心して校門まで向かうのであった。

「わりいな、皆。待たせちまって。」

俺が息を整えながら言つと、皆、別に大丈夫だよ。的なことをいつてくれた。

そして、皆で雑談をしながら、校門を出て家に向かつて歩きだした。家に向かう途中でエレンと姉貴と真と炒子が、俺と腕を誰が組むかでもめていたが、周りの視線が痛かったので、それを止めさせて、家に帰った。

クラスの差別そして決闘へ（前書き）

今回は結構ながいですよ。

そしてやっとバトルって感じです。

クラスの差別そして決闘へ

俺は今、家にある自分の部屋でくつろいでいる。

家に帰りついた後すぐに、姉貴と真が、準備があるから。といってまた、家から出ていった。俺は何故この時忘れていたのだろう？ 姉貴達は信じられないぐらいのブラコンであると……

「央君、ちょっと降りてきてくれない？」

と姉貴が声をかけて来た。しかし、何かがおかしい。何時もと少し声が違うような気がする。だが、気のせいだと思いリビングへと降りていった。

リビングに着くと、いきなり、魔法が飛んできた。俺は身体強化魔法を即座に使用し回避しようとするが、何故か体が動かない。下を見てみると、属性付加した身体強化魔法を使ったエレンがいた。

俺は、戸惑いながらも攻撃から身を守る為に俺だけが使える無詠唱の古代魔法を使った。中身は古代魔法である『アクア・シールド』と変わりはない。そう、俺は例外で古代魔法を無詠唱で使えるのだ。

魔法同士がぶつかり消滅した。どうやら相手も初級魔法を使ったらしい。（ちなみに属性魔法は、初級、中級、上級、最上級の4つに分けられている。）

俺は魔法を撃ってきた相手にエレンを引き剥がしながら聞いた。

「おい真、何するんだ!？」

「お兄ちゃんがいけないんだよ。だって、お兄ちゃんから知らない女の子の匂いがするんだもん仕方無いよ。」

「えっ、何を言っているんだ?」

「だからね、皆に集まって貰ったんだ。お兄ちゃんをお仕置きするためさ。」

いや、いつている意味がわからない。俺は別に幼なじみズ以外の女の子とふれ合った記憶は・・・あーあるな。うん。しかし、たった1、2秒だぞ。匂いなんてわかんねえだろ普通さ。

しかし、愚痴ってばかりでもしょうがないのでここは、逃げることにしよう。そう思い、身体強化魔法に電気の属性を付加して、逃げようとする声かけられた。

「無駄だぞ、央太。この家には私達四人で作った結界が張っているからな」

炒子お前も来ていたのか。てかいつの間に結界なんか・・・しまった。家に帰りついて言っていた、「準備があるから」とはこれの事だったのか!

「ちっ、皆誤解だ俺は別に女の子とイチヤイチャしてきたわけはない。ただ階段から落ちてきた子を助けただけだ。」

「じゃあ、今の『ちっ』でどういう意味なんだ? ああん?」

と炒子が凄んでくる。俺は、

「どうせ言ったって信じてくれないとおもったからだ。」

と本心を語ると、この場の気温が一気に下がった。しかし、すぐに暖かく、いや暑くなった。前者は姉貴と真が全力でSASに魔力を注ぎ、水の魔力が溢れだしたから。後者は、炒子とエレンの火と電気の魔力がSASから溢れ始めたから。

「お、おい皆。何でそんなに魔力を入れているんだ?」

「「「「だつて央君（お兄ちゃん）（央太）（央太様）が私達の

ことを信用してくれないから、お仕置きが余計に必要でしょう？（じやない）（ですか）（だろ）「……」
あゝあ。選択肢ミスったかな？

翌日、目が覚めると俺はベッドの上にいた。横を見ると、幸せそうな顔で姉貴と真が寝ていた。

俺は二人を起こさないようにベッドを抜け出すと、洗面所へと向かった。

「あゝあ。こりゃ酷いな。」

と俺は、鏡を見ながらぼやいていた。結局あの後、現代魔法の上級魔法（現代魔法の上級魔法は古代魔法の中級魔法ほどの威力しかない。）を四方向から受けてしまい、記憶が途切れていた。

俺は気合いを入れ直し、治癒魔法をかくて顔のキズだけでも治してから朝食を作って、姉貴達が起きてくるのを待つて学園へ出掛けた。

今日、学園ではクラス発表が有るので、早い時間にも関わらず沢山の人がいた。

この学園は属性別にクラスがA〜CまであつてAから順に成績のいい順に入っていく。そして、各属性で一番の成績優秀者が集められ

たSクラスがある。また、逆に各属性の成績最下位が集められたGクラスがある。

さて、Sクラスを見てみると、水属性は真、火属性は炒子、電気属性はエレン、土属性は圭悟、召喚術は神流、と言っ具合になっていた。風属性と草属性は知らない名前だった。何にしても、予想通りと言ったら予想通りなのだが風希の名前がないのが以外だな。と思っっていると、真もそう思っっているらしく、

「風希の名前何でないんだろう？」
と言ってきた。

「後で本人でも聞いてみるか。」

「そうだね。でもお兄ちゃんと同じクラスになれないのはショックだな。」

と悲しそうに言ってきた。真は震さんに全力で計測に望むように言われていたのだ。

「良いじゃないか。俺は真がSクラスに入れて嬉しいぞ。」

と言いながら頭を撫でてやると、顔を赤くしながら、「うん。」と小さな声で答えた。

そして、俺のクラスを見てみるとなんとGクラスだったのだ。（俺は一応水のクラスで受験している。）

やっべ、めんどくさいからってちょっと適当過ぎたかな〜と思ってGクラスのメンバーを見てみると、風希と召慈の名前があった。おかしいな、風希はさっきいった通りSクラスに居てもおかしくないし、召慈は神流について学年次席をとるくらいの実力を持っている。まあ、考えても仕方無いので教室着いてから聞こうと思っ真と別れて教室に向かった。

教室に着くとそれは酷い有り様だった。傾いている机に、今にも壊れそうな椅子本当に教室なのか？廃材置き場じゃなくて？と言えるぐらい酷かった。

机に向かって歩いていると、召慈と風希が喋って居るのが見えたので、机に鞆を掛けてそちらに向かった。

「おーい、風希、召慈、おはよう。なあ、何でお前らGクラスなんだ？」

「僕はわざとだよ。Sクラスは神流に譲ったは良いんだけど、Aクラスで一人ぼっちてのは寂しいだろ？だから、未来視を持つ聖霊神を出して

「なあ、お前さ気軽に聖霊神出したとか言ってるけどさ、それいちお最上級魔法だろ？そんなことに使うなよ。」

大丈夫だよ。ちゃんと家で使ってきたからさ。んまあ、それで央太がどのクラスに入るか調べてきてこのクラスに入ったんだよ。」

「まあ、いいや。それで風希は？」

「あつ、俺の場合はもつと簡単だよ。まず、朝っぱらから学年いや、学園の一位を争うほどの実力者達にぼこぼこにされて、その後ドアと一緒に氷付けにされたからなあ。もう、計測を受けられただけで奇跡だぜ？」

「ああ、そう言えばそんなこともあったな。」

「いや、後者はお前のせいだからな！？」

「はっはっはっは。おつと、先生来し座るかな。」

「うん。そうした方がいいと思うよ。」

「流すのかよ……。はあ、もういいよ。早く座れ。」

「おう。」

俺は席に戻っていった。

「よし、お前ら俺がお前らの担任だ。俺はお前達みたいなゴミ共の担任なんて嫌だが、まあ俺が就いてやるんだから有り難く思うんだな。」

ガタツ

「止めろ、風希。こんなやつ相手にする価値もない。」

と俺が横にいる風希を止めていると、

「おい、そこのお前、誰が『相手にする価値もない』だ、教師に喧嘩うつてんのか？」

ちなみに、魔法学園で教師をやるには、かなりの実力者でないといけない。

はあ、全くこんなバカは何処にでも居るんだよね。まったく。

「別に先生の聞き間違いじゃないんですか？」

といつの間にか、召慈がそう答えていた。

「ああ、黙つとれこの出来損ないが。顔は似ているが、妹とは大事な部分が大違いだな。」

「先生。何を言っているんですか？いくら双子でも違うのは当たり前じゃないんですか。それに、どこ見て言っているんですか？」

と召慈が笑いを堪えながらきいた。

そう。このどうしようもないやつ（これからは、Gクラスの担任と言うことで、ゴキ先生と呼称する）は、黒板に向かって言っていたのだ。原理は簡単で、まず召慈が、聖霊を出して方向感覚を混乱させ、俺が作った水の幻影を黒板の方におく。そして、風希の風で他の生徒達に魔法が見えないようにする。（この作戦を俺達はアイコンタクトだけで理解した。これぞ、幼なじみでこそ成せる技である。）すると、ゴキ先生は、突然黒板の方を向いて罵倒し出したように

見えるのだ。

「貴様ら、教師をバカにしてただで済むと思っているのか!？」

「でも先生、僕達何もしてません。周りの人に聞いてみたらどうですか？」

まあ、他の生徒達には見えていなかったのだから、生徒達に聞いても仕方がないだろう。

「お前ら本当だろうな？嘘をついているんじゃないのか!？」

ははは、ゴキ先生が必死に生徒達に聞いてまわっていた。

『キーンコーンカンコーン』

おっと、チャイムがなったな。授業が終わって、少しの休憩にはいり、先生も一度職員室に帰る。ゴキ先生は教室を出るとき、こちらを睨みながら出ていった。

「マジ腹立つな、ゴキ先生。」

と風希が話掛けてきた。

「まったくだよ。ああいう差別思想は虫酸がはしるね。」

と召慈も話しかけてきた。

「ああ、そうだな。しかし、相手にするのもめんどくさいからな。俺はシカトを決め込む事にするよ。」

「まあ、そうだな。あんなやつとは、目をあわせるのもイヤだしな。」

「ふう〜ん。じゃあ僕はもう少し恥をかいてもらおうかな？」

「止めとけ。時間と労力の無駄だ。」

「いや〜でもさあいつ心の中まで腐ってるよ?」

「それ、どういう意味だ?」

と風希が食い付いてきた。

「僕さ、ずっと心を見ることができる聖霊を出して居ただけどさ僕達と話している時、心の底から僕達を見下してるんだよ。それに、神流や真ちゃんのことバカにしてたし。多分たの人は、

「血縁重視主義」

そう。それだと思うよ。」

そもそも、属性魔法は、遺伝するものである。だから能力の高い人は血筋がいい人しかいないと考えている人達のことを『血縁重視主義者』という。また、こいつらは有名な血筋じゃないものはどれだけ能力が高くても認めようとせず、心の底から見下している。

「まったく。それじゃまた恥をかいでもらおうかな。」

「そうだよな。やっぱこういう奴らはとことんやってやらないとね。」

「うん。確かにそうだな。じゃあやってやるか。」

と風希が言ってきたので俺達は、

「もちろん。」

「当たり前じゃないか。」

と了承の返事をした。

キンコーンカンコーン

「おっと、授業始まるな。」

「本当だね。じゃあ僕は席に戻るよ。」

「ああ、わかった。」

と俺が返事を返しているとちょうどゴキ先生が入ってきた。

「なあ、央太あれってさもしかしてさ、

「ああ、お前の想像通りのものだ。」

だよな。」

俺が笑いを堪えながら答えると、風希も笑いを堪えながら返してきた。ちらっと、召慈の方を見て見ると、召慈も笑いを堪えていた。

「おい、くず共これは嘘発見機だ。今からこれを使って同じ質問をする。嘘をついてるやつがいたら、そいつは退学だ。」

まったく。相変わらずバカだな。そんな俺達に通用する訳ねえじゃん。

「ほら、貴様手を出せ。」

俺は大人しく腕を出した。嘘発見機が付けられ同じ質問をされた。しかし、俺は魔力を使って脈などをコントロールしているので、まったく意味がない。（ちなみに魔力で脈などをコントロールする事はかなり難しくSクラスでも、できる人は少ないだろう。）

そのまま、ゴキ先生は最後まで回りきった（召慈も風希も同じことをして逃れた。）が空振りに終わり呆然としていた。しかし、俺達は追い討ちをかけた。

「先生。頭おかしいんじゃないですか？」

「そうですね。先生病院いった方が良いですよ。」

「おいおい。もし老化だったらどうすんだよ？」

「あそつか。すいません、先生。やっぱ、現実を突き付けられるのはつらいですもんね。あまり気にしないで下さい。」

と風希が言つと、

「貴様ら、調子にのるなよ。」

とゴキ先生が言ってきたので、

「まあ、別に調子になんて乗ってないですけどね。」

と思った通りのことを返した。すると、ゴキ先生は黒板に自習と書きなぐって出ていった。

「はあっ、ざまーみろって感じだな。」

「そうだな。あれでもう今日のところは来ないだろう。」

「うん。それじゃ時間まで何する？」

そんなこんなで時間は、過ぎていくのだった。

そして、放課後になり（今日は1日目だったため午前で授業は終わりなのだ。）靴箱に向かうと、Sクラス組が大量の人に囲まれなが

らも既に待っていた。

「よつす。皆早かったな。」

と声をかけると周りに沢山いた男子連中を押し退けながら幼なじみズがやって来た。

「あ、お兄ちゃん。それがね、何か職員室で先生が一人ずつこく怒ってるらしくて、その先生をなだめる為に、私達の担任も行っちゃったの。何かその先生、学園で三番目に強いらしくて、二番目に強い、私達の担任が行かないといけないらしくて、殆ど自習だったの。」

それを聞いた途端、俺達Gクラス組は、吹き出すのを堪えて、「へえ、そうなんだ。」と答えた。

その時、後から、

「そんな、ゴミ共付き合わない方がいいよ。真さん」

とさっきまでSクラス組を囲んでいたイケメン達が話しかけてきた。俺達Gクラス組はそれを笑い笑いそうになった。だって言ってることがゴキ先生と一緒になんだぜ？

彼らの胸元のバッチを見て見るとAとかいてある。成る程、Aクラスの人達か。

しかし、真達はそれを聞いて、

「あんたに、お兄ちゃんの何がわかるの？もしナンパしたいならお兄ちゃん倒してからにしてください。後、真さんだなんて気安く呼ばないでください。」

おい、真、厄介なこと言うなよ。めんどくさくなる匂いがプンプンするぞ。まあ、でも怒ってくれたのは嬉しいけどさ。

「ダメですよ、真さん。それじゃあハードルが高過ぎます。せめてダメージをあたえる程度でないと可哀想ですよ？」

えっ、何でエレンまでそんなこと言ってるの？

「おいおい、エレン。それでもまだ、高いぞ。精々一発当てる程度じゃないと。」

おいおい、ニヤニヤしながらなんて爆弾投下してんだ炒子さん！？

「それもそうですね。すいません。間違えました。」

そこは肯定するなよ！？否定しないとめんどくさいことに・・・

「はあ！？こんなGクラスの雑魚に俺が負ける？あり得ねえな。

それじゃあ、真さん、俺が勝ったら俺と付き合ってくれる？」

「はい。もう一発でも攻撃を当てる事が出来たら。」

なんでオツケーすんの？もっと自分を大事にしようぜ女の子！！

「ははっ余裕余裕。俺は水属性の学年次席だぜ？こんなゴミに負ける訳ねえじゃん。それじゃあそのお前、明日の放課後に第一闘技場こい。さっさと勝ったら何してもらおかな」

「ちよっ、おい待てっておい・・・あゝあ行っちゃったよ。はあ。」

「やったね！！お兄ちゃん。これでお兄ちゃんの力を皆に見せつける事が出来るね」

「そうですよ、央太様。これはチャンスです。」

「ちようどいいんじゃない？私達もあゆうの付きまとわれて困ってるし、うん。ちようどいい。てことで頼んだよ私達のナイト様。」

くくつと笑いながら炒子が言ってくる。

「ねえ、嫌なお兄ちゃん？嫌ならいいよ。私が我慢すれば良いことだから。ぐすっ」

と泣きそうになりながら言ってくる。

あーもう、

「わあつた、わかつたよ。だから泣くな。」

「本当！やったー。ありがとう、お兄ちゃん」

なっ、嘘泣きだと・・・くっそー、いつの間にこんな悪女になったんだ。昔はあんなに素直だったのに・・・

「やだなー。お兄ちゃん 今も十分素直じゃない」

な、なんだと。まさか俺の心の中を

「別に読んでなんかないよ？」

読んでいるだー！。くっ、流石に囊さんの姪だな。

「まあ、いいや。取り敢えず、帰るか。」
ちなみに、神流と圭悟はこのやり取りを苦笑しながら見ていた。

次の日、何事もなく学園についた。授業は苛めすぎなのか、ゴキ先生は来なかった。（ここは、最低クラスなので、先生は一人しかいない。）おかげで授業は全て自習となり、放課後の決闘までゆつくりする事ができた。まあ、ぶつちやけ、緊張はしていない。ただ昨日、姉貴に話たら、晩飯をたらふく食べさせられて少しいや、結構胸焼けがする。風希と召慈が流石に心配して、いろいろやってくれた。

そして、放課後がきた。俺は体調が良くなり欠伸を堪えながら、SAS準備して第一闘技場に向かった。

「お、良く逃げずにきたな。」

闘技場に着くと水属性の学年次席（これからは、イケメソ君と呼称する）が話しかけてきた。まあ、相手をする必要もないので無視している。

「えっ、なにもしかしてビビってんの？でも、今更遅いんだよねーくつくつく。」

何かとてつもない勘違いをしているがめんどくさいので訂正はしない。すると相手は、どんどん天狗になっていく。すると真が、

「今のうちに吠えときなさい。決闘が始まれば、あなたなんて、秒殺なんだから！！」
と言った。

「へえーそうなんだ。じゃあ一分以内に倒せなかったら、俺の勝

ちで良いよね？」

「当たり前じゃない！！その代わりお兄ちゃんが勝ったら二度と私達の前に現れないでよ！」

「いいぜ。なんならGクラス以下のクラス、伝説のHクラスに入ってもいいぜ。なあ皆！」

すると周りから「当たり前だ。」と言う声が聞こえてくる。

「じゃあ、決まりね。ちゃんと約束守りなさいよ。もし、破ったら退学して魔力の剥奪よ。」

「いいぜ。ここにいる皆が証人だ」

なあ、真、お前はさ、余計なことしか言えないのか？まあいいか、これであのイケメソ君が近づかなるなら。にしても、やれやれ、まためんどろな条件が増えたもんだ。

そして、いよいよ決闘が始まる。審判はSクラスの担任の先生が勤める。

「それでは、ルール確認をします。まず、央太君の勝利条件は相手が降参するか、戦闘不能になるかのどちらかなれば勝ちです。今度は――（イケメソ君）の勝利条件は、相手が降参するか、戦闘不能になるか、一回攻撃を当てるか、一分以内に倒されなければ勝……。ち？ってこれおかしいじゃありませんか！！何で、――（イケメソ君）の方が有利何ですか！？こんなのおかしいですよ。学年次席対Gクラスの生徒ですよ？普通、逆じゃないんですか？」

「大丈夫ですよ先生。本人が認めていますから。」とイケメソ君が言うが、

「しかし、これは……」

「大丈夫よ。むしろハンデが少ない位だわ。」

理事長がそこまで言うなら……。良いでしょうそれでは、始めます位置についてください。武器を予め作るのなら、作って下さい。」

「はい。水よ敵を貫く刃となれアクア・ランス。」

「何だ。所詮古代魔法の初級魔法じゃないか。俺は武器なんて入

りません。」

「分かりました。それでは始めます。いざ、ファイト!!」

かけ声と同時に身体強化魔法を使用、相手は、いきなり広範囲攻撃である、現代魔法の水属性の弾丸を撃ってきた。ぶっちゃけ避ける隙間がないほどだ。普通の身体強化魔法ならだけど。俺は一瞬で電気属性を付加して、上に飛ぶ。それだけで、弾丸の範囲から脱出、そのままブレスレット型のSASに魔力を流し、空中に水で出来た足場を形成し電気属性を付加した身体強化魔法を使ったまま、足場を蹴り敵に向かって突っ込む。試合開始から、まだ3秒もたっていない。突っ込みながら、敵に水の槍をつきだした。槍は先が丸くなっているため、刺さりはしないが、電気属性が付加されているため当たれば気絶は確実だ。しかし、あっさりと気絶させてやるつもりもないため、治癒魔法を付加し、気絶しないようにする。つまり、相手はずっと電気を浴び続けるわけだ。そんな感じの攻撃を突っ込んだ勢いのまま当たった。

外野side

外野が見たのは、イケメソ君が水の魔法弾をばらまいて勝利を確信した瞬間、上からいきなり中央が降って来て、気付いた時には槍がイケメソ君の腹に突き立てられている状況だった。

中央side

腹に槍が当たったため、そのまま作った槍の能力を使用し、ダメージを与え続ける。多分、五秒も浴びていけば、普通の人なら気が狂うほどの電流がながれている。まあ、一応こいつらも魔法使いなので三十秒位は持つだろう。

「おい、降参するか?」

「ぎゃああああああああ」

「うるせえんだよ！」

俺は槍を強く押し付けていると、

「ストップ！試合終了よ」

と我に帰った先生が止めてきた。しかし、

「でも先生こいつまだ、降参してませんし戦闘不能でもないですよ？」

もう、既に槍を押し付けてから十秒以上経っているのにまだ降参しない。こいつ結構、根性あるな。

まあ、痛すぎて喋れないだけだろうけど。とか思いながら見てみると、未だに「ぎゃあああああ」としか言わないのでうるさいなーと思い、ちよつと電圧を上げてみようかな？と考えていると、

「央ちゃん、止めてあげなさい。」

と隼さんの言葉が響いたので治癒魔法を解除して、電気を浴びせて、気絶させた。

「ーーーー（イケメソ君）戦闘不能のため、勝者は、見中 央太君です。」

俺は別に嬉しくもないので、SASを片付けて欠伸をしながら皆の下に帰った。

イケメソ君サイドにいた人達は未だに啞然としていた。まあ、しょうがないだろう。なんてたつて学年次席がGクラスの相手にあれだけの好条件なのに、二十秒かからずにやられたのだから。

俺はめんどくさいことをやっちゃったなー。と思いながら、皆の方に歩いていった。

クラスの差別そして決闘へ（後書き）

感想をお願いします。できれば、バトルについて。

決闘後の平和な日常

「お兄ちゃん」

と第一闘技場を出て、皆の下に向かうと、真が抱きついてきた。

「まあまあじゃねえの？」

「そうですね。央太様が本気を出せば、一秒かからずに終わったはずなのに。」

「本当だな。ちよつと、遊び過ぎじゃないのか？」

「うん。まあ、でも相手を完全にボコボコにしたい、って気持ちも分かるよ。イケメソ君も心が腐ってるみたいだしさ。」

と上から、風希、エレン、炒子の順で辛口の評価をしてくる。しかし、最後の召慈の言葉が不思議だったので、聞き返す。

「何でそんなこと分かるんだ？」

「決まってるじゃないか。聖霊を放ってたんだよ。心を読めるやつをさ。」

と召慈が答えると、

「あ、やつぱり？ いやね、私もさっきから聖霊を感じてたのよね。だいたい予想はしてたんだけど、やつぱり召慈のだったのね。」
と神流が会話に混ざってくる。

「ああ、そうだよ。んで、イケメソ君は心の中で真ちゃんに、
して　　する。さらには　　してから　　する。的な感

じの妄想をずっとしてたんだよ。」

と召慈がいうと、神流が顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
まあ、当然俺に抱きついてた真にも聞こえ、「お兄ちゃんが相手なら別に・・・」と、とんでもないことを呟きだした。

「まあ、確かにクズ野郎だな。だったら、もう少し電流浴びせとけば良かったかな？」
「だめよ。あれ以上やったら、あの子壊れてたわよ。」

と曩さんが割り込んでくる。確かに曩さんに言われたから、攻撃を

止めたんだつたな。とか考えていると、

「ちなみに私も、さっき言ってたようなプレイは許容範囲ないだから、可能よ。」

「いや、しねえーよ!？」

てゆーか、聞こえてたのかよ。

「もちろん。あなたの心の声までね。」

よし、今日から無心になる練習をしよう。と俺は心に固く誓うのだった。

「まあ、無理だと思うけど。」

あー！ー！ー！。もう読まないでくれー！。と俺が心の中で絶叫していると、Sクラスの担任の先生（これからこの人のことは、美人で胸もでか・・・おっほん。スタイルもいいので、サキユバスから取って、サキユ先生と呼称する）途中で信じられない程の殺気を感じながらも、ニツクネームを付けた。俺の後の方で霧さん、真、エレンが自分の胸に手を当てて、「やっぱり、大きい方が良いのかな?」とかなんとか呟いているが、気にしない。気にしたら負けだと思う。ちなみに炒子は自信があるのか、勝ち誇ったような顔をしている。

ところで、サキユ先生がこちらに来て、俺に聞いてきた。

「あなた、水属性のクラスよね?どうして、電気属性を付加した身体強化魔法が使えるの?」

おお!流石学園内において、霧さんに次ぐ実力なだけはあるな。あの一瞬で見分けるとは。

（ちなみに電流を流していた時は、電流が見えないようにしていたので、外からではイケメソ君がいきなり苦しみ始めたようにしか見えない。）

「ええ、そうですよ。でも別に属性魔法が二種類使える人は、少ないだけで居るじゃないですか。」

そう。属性魔法が二種類使える人はいる。といっても、日本には指で数えられる程しかないが。ちなみに霧さんも二種類使える。霧

さんが入学式の時に使った氷の魔法は、水属性と風属性を合わせた魔法だ。この事より、翼さんが使える属性魔法は水と風属性になる。「確かにそうですが……しかし、それなら政府に申請しないとだ

「別に申請なんてしなくても良いんですよ。俺は二種類使えると言っても、しょぼいレベルですから。」

それでも申請しないといけません。なので、登録のために親の名前を教えてください。」

と先生が言ってきたので、

「先生。俺、親いないんですよ。今の親は義理の親なんです。だから、正確な血筋なんて、分からないので登録してもま意味がありません。」と答えた。この、親の名前が必要と言うのは、血筋を調べるために使うので先に釘を指しておいた。政府は、二種類、属性魔法を使える人より、その人の血筋の方を知りたがる。理由は簡単で、その血筋の人と色々な人を結婚させて、新しい属性魔法が二種類使える人を作るためだ。（属性魔法が二種類使える人は何故か、子供が生まれにくい。）

ちなみに、俺が言っていたことは事実だ。つまり、真は義妹で姉貴は義姉にあたるのである。

サキユ先生は、

「そうだったのね。それじゃあ仕方無いわね。嫌なこと聞いてごめんなさい。」

と言ってきた。少し寂しそうに言った効果はあったかな？別に俺は何とも思っちゃいないんだが。真達の親だって本当の親だと思ってるし。はっと、気付くめっちゃ暗い雰囲気になっていた。しかし、召慈だけはニヤニヤしていた。ああ、そっか、あいつ心の読める聖霊を出してたんだっけ。まあ、それにしても、あいつよく持つよなああいう、特別な力を持った聖霊は一分でも続けて出すのは大変だ。って聞くぞ？それをもう三分以上だなんて、規格外過ぎるだろう。まあ、ここにいる奴等は皆、規格外なので気にしないことにする。

さて、

「おい、皆そろそろ帰ろっぜ。」

「いいよ、分かった。」

「うん。お兄ちゃん。」

「そうですね。帰りましょうか。」

「じゃあ、私も帰ろっと。」

「そうね。帰ろっか。」

「ああ、早く帰ろぜ。」

「そうだな。帰るか。」と、召慈、真、エレン、炒子、神流、風希、圭悟のここにいた。幼なじみズの全員が返事をしたので、そのまま皆で雑談しながら帰った。

家について、くつろいでいると、真が寄りかかってきた。若干だが、暗い顔をしている。

俺が「どうした？」と聞くと、

「今日、疲れた？」と聞いてきた。

うーん、なんかおかしいな？他にもっと聞きたいことがあるような顔をしているのだが。まあ、とりあえず、

「いや、別に。」

と質問に答えた。ちなみに、これは事実。まだ、一昨日真達にお仕置き？という名の拷問を受けた時の方が、倍はきつかった。いや、マジで。

にしても、やはり真はまだ何か聞きたそうな顔をしている。しゃーない。少し自分で考えてみ・・・るとあった。あれしかないよな。うん。よしよし。なら俺が言うことは一つだな。「俺は親父達を本当の親だと思っているぞ？それに、真や姉貴だって血は繋がってな

いけど、家族だと思っているから、別に寂しくないぞ。」

と俺は本心を伝えた。すると、さっきまで暗かった真の顔は明るくなり、笑いながら、

「うん。そうだよね。私達は家族だよね！」

と嬉しいそうに抱きついてきた。

まったく、手間のかかる妹だな。とか思いながら頭を撫でてやっている姉貴が帰って来たので、二人で迎えにいった。

「お帰り、姉貴。」俺が声をかけると、（真は既に離れている。）

「ただいま、央君。」

と言って抱きついてきた。いや、抱きつかれていた、と言った方が正しいかな。あまりにも速すぎて、身体強化魔法を使っただんじやないか？と思わせる程の速度だった。

「うーん。今日は央君エネルギーが不足しちゃって危なかったよ。」

と俺の胸板に頬を擦り付けながら言ってきた。不足だけでこうなるのだからもし、そのエネルギーが切れた時には想像も出来ないようなことになるのは間違いないだろう。

「あつ、そうだ！ねえねえ、央君。明日からさ、一緒にお昼ご飯食べようよ。」

と姉貴から、提案がきたので、

「まあ、いいよ。」俺はあまり考えることなく、了承した。

「つてな訳で今日は皆で飯食おうぜ。」

と俺は風希と召慈に提案した。二人とも、

「別にいいよ。」

「俺も構わねえよ。」
と心良く受け入れてくれた。

そんなこんなで、昼休み。(ゴキ先生は未だに学校には、来ていない。)俺達は集合場所である、屋上に向かった。屋上では既に皆集まっっていて、俺達は最後だった。ちなみにメンバーは、姉貴、真、エレン、炒子、神流、圭悟、風希、召慈、俺そして、雲さ……ん？って、

「何で雲さんがいるんですか!？」

「そんなに驚かなくても良いじゃない!ああ、私スツゴい傷付いたわ。これはお仕置きしかないわね。」

という言葉と同時に、周りの気温が下がり始めた。これは、雲さんが氷属性の魔法を使う合図だ。

「ちよつと、雲さん。落ち着いてください!俺が悪かったですから!」俺が必死でなだめていると、

「本当に反省してる?」

と聞いて来たのでしめた!と思い、

「はい。海よりも深く。」

と答えた。すると、

「じゃあここに座りなさい。」

と自分の隣を呼び指していった。俺が胡座をかいて座ると、雲さんが膝の上に乗ってきた。俺は、呆れながら「あんた何歳だよ」と思っている、

「うるさいわね。折角の外見なんだから上手に使わないと意味ないじゃない。」

と言ってきた。おお、すつげ。ロリ体型をこんな形で乗りきってる人がいるとは、流石雲さん。やっぱり、他の人とは発想から違うな。おっと、これは別に悪口じゃないですヨ。ホントデスヨ。

つてな具合で、楽しい昼飯の時間は、過ぎていった。

そして、午後の授業中、

「1年Gクラス、見中 央太君。至急、会議室まで、きてください。」

と放送がかかった。

「なんだ、央太。なんかやらかしたのか？」

「いや、俺は別に何かやらかした記憶はないんだけど・・・」

「まあ、取り敢えず行つて・・・いや、僕らも暇だしついていくよ。」

「分かった。それじゃあ、いくか。」

そうして、俺達は教室を後にした。

決闘後の平和な日常（後書き）

次は、
またもや決闘の予定です。
でも、戦うのは・・・

再び決闘

俺、風希、召慈の三人は、会議室に向かっていた。

「なあ、央太。本当に何もしてないのか？」

「当たり前だろ？てゆうか、何かやらかしたんなら、会議室じゃなくて職員室だろ？」

「まあそうだけど、でももしかしたら、ゴキ先生のことかもよ？」
「んっ。確かにあり得るかも知れないが、何か違うような気がするんだよね。まあ、あくまでも勘なんだけどな。」

「えっ、ああ。分かった。もう帰っていいよ。そうだね。あながち間違いでもないかも。さっき飛ばした聖霊が今帰ってきて、会議室の様子を聞いたら、中に真ちゃんが居るってさ。」

「真が？あいつは何かやらかすような奴じゃないんだけどな。」
「どうしたんだろ？と考えていると会議室に着いたのでドアを開けて入った。」

「失礼します。」と声をかけながら、入った。風希達も同じように声をかけながら入ってきた。中には、サキユ先生と真、あと見知らぬ男子生徒がいた。彼の胸元を見るとSとかいてある。成る程。Sクラスの生徒か。サキユ先生の方に視線を向けると、サキユ先生はこちらを見て、何故、風希達が居るのか分からない。というような顔をしていたので、

「心配だったから、付いてきたんです。授業は自習ですし、友情の方が大事ですから。」
と召慈が説明していた。

嘘つけ、面白がつて付いてきただけの癖に。まあ、でも俺の問題じやなかったから、ちよつとは心配しているのだろう。（ちなみに、俺の心配はするだけ無駄だと言っていた。）

サキユ先生は召慈の言葉を聞いて納得したように頷き、（納得すんのかよ！）俺達に座るように促した。俺達が座ると、サキユ先生は話始めた。

「実はですね、ここにいる風属性のSクラス生徒の彼と真さんが喧嘩をしたんです。先に仕掛けたのは、彼らしいのですが、理由を話してくれないんです。真さんは「何も言いたくない。」の一点張りで、そこにいる彼は、央太君を連れてきたら、話すと言ったので呼んだんですが・・・あの話して貰えませんか？」

とサキユ先生が、風属性のSクラス生徒（これからは、彼の偉そうな顔が腹立つので、天狗君と呼称する）に話すことを促した。（ちなみに、真はいつの間にか、俺の腕に抱きついていた。）俺は真の頭をゆっくり撫でながら、天狗君の話を聞いた。

「まず、友達がそこにいる男の話をしていたのを聞いて、そういえばSクラスに同じ名字の人がいたなと思い、授業中（Sクラスの生徒は授業中だけ同じ教室に集まり、授業を受ける。それ以外は、基本的に各属性のAクラスの教室にいるように言われている。）に聞いてみようと思ひ聞いていたら、いきなり彼女が喧嘩を売ってきたんです。」

と天狗君が答えると、

「違います。嘘ばかり言わないでください！。本当は、私がお兄ちゃんの話をしていたら、「Gクラスのゴミ共と家族だなんて残念ですね。」って言うてきたんです。だから私が「でも、あなたなんてGクラスにいる、お兄ちゃんとその友達である風属性のGクラス生徒、召喚術のGクラス生徒にも勝てないわよ。」と言ったら、いきなり殴ってきたんです！」

成る程な。まあ確かに天狗君は自尊心が高そうだな。しかし、人の妹をいきなり殴るのは賛成できないな。とか考えていると、

「だって、しょうがないじゃないか！こんなゴミ共に負けてる何て言われたら！だから、俺はお前らに決闘を申し込む。この女は、Gクラスのクズ三人に勝てないといった。だから三人まとめて相手してやる！」

と天狗君が喧嘩を売って来たので、妹を殴ってくれた、お礼をしようかなー。などと思っていると、風希が、

「いいぜ。俺が相手してやるよ。もし俺に勝てたら、他の二人と戦えばいい。」

と言うと、天狗君が、

「はあ、何言ってるんだお前？お前一人なんか、秒殺してやるよ。」
と言い返してきた。

まあ、それじゃあ今回は風希に譲かと思い、召慈の方を見ると、召慈も頷いてきた。だから、

「サキユ先生。ということなので、明日闘技場の予約をお願いします。」

と俺が言うと、サキユ先生はやれやれと頭を振りながらため息をついていた。

そして、会議室を出ると、

「おい、風希。絶対に勝てよ。意味もなく真を殴った罪は重いかな。」

「わかってるよ。おもいつきり屈辱を味あわせてやるよ。」

まあ、風希なら本当にやってくれるだろう。さて、

「真、お前意地がわるいな。俺達三人の名前を的確にあげるなんてさ。」

「本当だよ。しかも僕ら三人まとめて相手するなんて自殺行為ではないし。」

と召慈も賛成する。

「だって、ねえ？」と真が少しバツが悪そうにモジモジする。

「あつ、そうだ。風希さ、あの戦法を使つの？」

と召慈が思い出したように聞くと、

「ああ、もちろんだ。あれ以上に屈辱的なことは無いだろうからな。」

と風希がにやけながら答える。

あの戦法って何だっけ？・・・あつ、

「対風属性魔法使いよのあれか！」

「んゝまあ、今は対風属性魔法使い用じゃねえけどな。」

と風希が答える。よっしゃ、ビンゴだぜ。そうか、あれ使うのか。うん。これは面白くなりそうだ。さて、真に頼みたいことが出来たので、真の方を見ると、真はまだ、あれが何なのか、考えているみたいだった。なので、昼休みにでも話そうと思い、一旦別れた。

そして、昼休みがきた。屋上に集まったみんなに、俺は今回のことを話、みんなにお願いを一つした。

「明日の放課後、闘技場に人を沢山連れてきてくれ。」

皆、不思議そうな顔をしていたが、了承してくれた。そして、この場は解散し、教室に戻る途中で、召慈が、

「あんな頼み事をするなんて、真ちゃんよりも、意地が悪いじゃないの？」

と召慈が笑いながら言ってきたので、

「そうか？」

と俺も笑いながら返した。

そして、翌日の放課後。

闘技場には、風希と天狗君が向かい合ってたっていた。今はサキユ先生がお互いの勝利条件を確認している。闘技場のスタンドは人で埋まっている。（俺達はスタンドの下にある特別席から見ている。）今から起こるであろう出来事を思うと、思わずニヤケてしまう。召慈も同じらしく、さつきからニヤニヤしている。そんな俺達二人を、幼なじみズは冷たい目で見てきた。

おっと、決闘が始まるみたいだ。

「それではいきます。レディ、ファイト。」

とサキユ先生の慟とした声が響くと同時に相手は『風よ我が身を運ぶ羽となれ、ウインド・フライ』としっかり、詠唱をして空に飛ぶ。（ちなみに、空を飛ぶことは、風属性の魔法使いでもなかなか難しく、古代魔法の上級魔法にあたる。）

でも、これで風希の勝ちが決まった。相手はそんなことに気付かず、「お前は空も飛べない癖に決闘をしようと言うのか？流石Gクラスのカズだな。いや、飛べないのか。悪いな、Gクラスには無理な話か。」

などと、空を飛ばない風希を見て、バカにしている。幼なじみズも、「どうして空を飛ばないのか？」

と不思議に思っていたので、俺と召慈が笑いを堪えながら、

「まあ、見とけて。」

と言つて、皆をなだめた。そしたら、天狗君が、

「つまんねえな。飽きたから終わらしてやるよ！」

と息巻いたが、進まない。天狗君は何度も進もうとするが、進まない。そして次の瞬間、逆さづりになっていた。（幼なじみズはそれをみた瞬間、風希が何をしているのか理解して、俺達と一緒に笑いを堪えるのに必死になった。）そして今度は、流れるように踊り始めた。天狗君は必死になって、止めようとするが、止まらず、そのダンスと表情のアンバランス差が面白く、俺と召慈はもちろん会場

のいたるところで、笑いが起きている。天狗君は顔を怒りと羞恥に歪ませながらも今度は壁にぶつかり始めた。だんだんと顔が恐怖に強張っていった。そして最後に床に向かって頭からまっすぐ可愛らしく「きゃあああああ」と悲鳴をあげながら進んでいった。（これにより、天狗君オカマ説が浮上した。）そのまま床に直撃して頭を埋めて、体をピクピクさせながら気絶した。もう、観客と俺達の笑いは止まることはなかった。

風希 side

天狗君はいきなり空へ飛んでいった。俺はここまで、すんなりと作戦通りに行き過ぎて拍子抜けしてしまった。その間に天狗君は何か言ってきたが、聞こえなかった。そろそろ始めるか。と思い、周りの空気に魔力を流し始めた。それにより、闘技場全体の空気を掌握に成功。俺はニヤケるのを我慢しながら、風が俺の意思でしか起こらないように設定する。これであの天狗君は動けなくなった。それじゃあ、まずは踊って貰おうかな？

俺は上手に踊れる用に、周りの空気から風を生み出す。うゝん、思ったより、難しい。まあでも、もう三分くらい踊らして飽きてきたので、今度は物理的ダメージを壁にぶつける事によって与える。天狗君の顔が恐怖で強張りだったので、その顔をみんなに見せた後、床に向かって頭から落としてやる。途中で可愛いらしい悲鳴をあげていたので、ついつい笑ってしまった。

「勝者は、神谷 風希君。」

とサキユ先生が、信じられない物をみた、という顔で告げる。俺達は走って風希のもとに向かって行って、本日面白い物を見せてくれた幼なじみに、祝福の言葉を捧げた。

しばらくすると、雲さんがきて、笑いながらやり過ぎだ。と言ってきた。そして、後の処理を雲さんに任せて帰ろうとしたら、サキユ先生が走ってきた。一体どうしたんだろう？と思っている、

「風希君、あなた一体今のどうやってやったの！？」

つと、そういうば、サキユ先生は風属性の魔法使いだっただけ？そして、質問された風希は、

「やだなー、先生。俺は何もしてないじゃないですか。」

と笑って答えただけだった。

再び決闘（後書き）

今回は、日頃残念な風希が活躍しました。そのうち、召慈も活躍させようと思っています。是非、感想をお願いします。

休日？

今日は、休日だ。

俺達の通っている学園は、週休2日制なので土日は休みなのである。思い返せば、入学してから五日間はいろいろあった。

まずは、入学式。脱走に失敗して、霧さんに捕まる。その後、身体強化魔法を使い学園内を走り回り帰宅。帰宅すると、今度は浮気の疑いをかけられ、（別に誰かと付き合っている訳ではないのだが）ボコボコにされ気絶しながら、就寝。

2日目はクラスの発表を見て驚き、先生のクズ加減を見て驚き、イケメソ君に決闘申し込まれたことに驚きと驚いてばかりの1日だった。

3日目は決闘があった。あの程度で学園次席とは、今思い出しても笑える。

一昨日は姉貴達と一緒に昼ご飯を食べ始め、授業中に呼び出しをくらいい、天狗君に決闘を申し込まれた。まあ、俺が受けた訳じゃないけど。

昨日は、風希対天狗君の勝負があり、風希の圧勝。最後に格好良く決めたあと、サキユ先生の前から立ち去る時に転んでしまって台無しになった。まったくどこまでいっても、残念なイケメンである。

いやー、思い返せば本当に濃い五日間だった。普段の俺じゃあり得ないぐらいの忙しさだった。学園に入る前は、もう凄いものだった。学校すら、サボったことが合計で3ヶ月分ぐらいにはなるだろう。

あゝあ、なつかしな。せめて、休日ぐらいゆつくりしたかったぜ。ということで、俺は今日も予定が入っている。それは・・・勉強会だ。

てな訳で、俺は今、家を掃除している。何で掃除をしているのか？そんなの簡単だ。会場が俺の家だからだ。何故、勉強会をするのか？それは、昨日にさかのぼらなければならぬだろう・・・。

昨日、風希が転けた後、雲さんが言ってきた。

「あつ、月曜日に筆記と、実技の試験するから。」

「・・・えつ、」驚いたのは、俺と召慈、そしてまだ起き上がってこない風希だけだった。

「えつ、お兄ちゃん知らなかったの？私達は最初の授業の時、言われたよ。」

と真が言ってきたので、

「・・・最初の授業の時・・・」俺達三人は、思い出す。ゴキ先生が初めて来たときの事を・・・、

「あつ、俺達聞いて無いわ。」

「うん、そうだね。僕らは何も聞いてない。」

「先生なんか俺達を罵倒した後、黒板に自習って書いてどっかいたんだったもんな。」

俺、召慈、風希の順で答える。そして、

「・・・てことは、俺達受けなくていいですよ。雲さん。」

と三人で声を合わせて聞くと、

「まあ、それじゃあしょうがないわね。・・・とても言うと思ってるの!？」

と雲さんが乗りつつこみを入れてきた。しかし、

「あつ、でも央ちゃん私と愛し合ってくれな

「喜んで試験を受けさせてもらいます。」

・・・ちっ!

俺が試験を受けるむねを伝えると、盛大に舌打ちをしてきたのだった。

と言っわけで試験を受けることになったのだが、いかんせん時間が無いため、みんなに教えて貰おうと思い、勉強会を開くことにした。みんなにどこでやりたいかを聞くと、エレンと炒子が俺の家じゃないとしない。と言いだしたので俺の家ですることになった。

姉貴に相談したところ、リビングでするように言われた。

しかし、俺は今、自分の部屋の掃除をしている。リビングは一階で俺の部屋は二階。（ちなみに、姉貴達の部屋も二階にあり、一階はリビングやキッチン、洗面所などがある。）

一見、関係無さそうに見えるが、多いに関係ある。何故なら、確実にエレンや炒子が見に来るからだ。この前、この二人が来たときは、「部屋を掃除してあげます。（る）」と二人に強制的に入られ、俺のコレクションがいくつも見付かってしまった。

あの時は本当にヤバかった。もちろん怒られたが、方向が違ったからやばかった。二人とも、

「もう、言ってくればいつでも良かったのに……」

と言いながら、服を脱ぎ始めた。

いや、あの時は焦ったね。いやガチで。もし、あの時真が来なければ、俺の将来は決まってたね。うん。

と言っわけで俺は今、せっせと掃除をしている訳だ。

勉強会は午後からなので、まだ二時間ぐらい余裕がある。俺は自分の部屋の掃除を終わらして、姉貴たちを手伝うために下に降りていった。

掃除が終わったが、まだ約束の時間まで一時間近くあるので、姉貴達とゆったりしようと思い、姉貴がお茶を入れていると、ピンポン！とインターホンがなった。

「央君、今ちよっと手がはなせないから、変わりに出てくれな

い？」

と言われたので、めんどくさいな〜と思いながらも、玄関までいき、ドアを開けると、小学校低学年くらいで、銀色の髪を肩まで伸ばして、先が軽く丸まっている小さな女の子が大きいバックを持って立っていた。家を間違えたのだろうか？とりあえず、

「どうしたの？」

と聞いてみた。すると、封筒を差し出してきた。

受け取って見ると、手紙にしか見えなかった。うわっ、やっぱり。嫌な予感しかしねえ。

俺の第六感が警報を鳴らしているが、とりあえず裏を見てみた。すると親父達の名前があった。

ちなみに、名前をみた瞬間俺の第六感は「諦めろ」と告げていた。恐る恐る封筒を開けると、やはり手紙が入っていた。手紙を読んでみると、

「この子のこと、よろしくな！」

と書いてあった。やっぱり？

「て、訳なんだけどうする？」

俺は姉貴達に聞いた。

「どうするって聞かれてもねえ？」

「そうだよ。どうしようもないよ。」

と言ってくる。

「だよな。やっぱり、この子に聞いた方が早いんだけど・・・」
さっき、玄関にいた女の子は俺達の向かい側に座って居るのだが、警戒心剥き出しで睨んでくる。

しょうがないので俺は水の魔力を体から少しずつ、放出させる。

ちなみに、これにはちゃんと意味がある。人とは、自分が知らない人しかいない空間で、同じ属性の魔力を流されると、ついついその人のもとへ行ってしまふものだ。だから、俺は、全ての属性の魔力を流していく。しかし、反応しない。俺はもしやと思い、もう一つ流してみるが、これも無反応。じゃあこれは？と思い魔力を流した瞬間、その子が抱きついてきた。

俺は驚いていた。抱きつかれたことではなく、この子が反応を示した属性について。そんな、バカな！何で世界でも十人といない属性の持ち主がここにいるんだ？

しかし、ここに来たということは・・・確かにここにいた方が安全だな。親父達の判断は正しいと思う。よし、それならやることは一つだ。俺は、女の子を膝の上にのせて、未だに女の子が俺に急に抱きついたことに衝撃を受けている姉貴達にいった。

「この子は、家で預かるう。」と。

休日？（後書き）

新キャラ登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8017x/>

ええ～めんどくさい

2011年10月26日14時07分発行